

真理のことば

死は生に向かって噛みついている

藤田正勝

fujita masakatsu

「真理のことば」という言葉を耳にして何を思い浮かべられるでしょうか。『ダンマパダ』(Dhammapada)という仏典のことを思い浮かべられる方も多いのではないかと思います。「ダンマパダ」というのはパーリ語で文字通り「真理のことば」という意味です。かなり古い時期に成立した仏典で、韻文の形で書かれています。おそらく出家した修行者たちが日々誦詠したのであろうと思います。

人間存在への深い洞察が、簡潔な、そして心に響く言葉で語られています。たとえば次のような詩句がそのなかにあります。

花を摘むのに夢中になっている人を

死がさらっていく。

眠っている村を

洪水が押し流していくように。

インドの人々にとって死が大きな問題であったことがこの文章からよくわかります。しかしそのような詩句を日々朗唱したのは、人間がつねに死から目をそらして生きようとする存在であった(ある)からではないでしょ

うか。人の世のはかなさをつねに思い起こす（あるいは思い起こさせる）必要があったのだと思います。

もともと人間は、死という大きな問題を抱えながら、そこから眼をそらそうとする矛盾した存在であつたと考えられますが、現代のわれわれは、いつそう死に向きあうことが少なくなつたように思います。一つには、摘むべき花が、その種類も量もブツダの時代とは比較にならないほどぼうだいなものになつたからです。われわれの関心は花の方にいつそう向けられ、それ以外のものにまなざしを向けることがたいへん少なくなりました。

そしてもう一つには、死という現象自体がわれわれに遠いものになりました。私などが子供の頃は、子供でも、家で死を迎える祖父や祖母の最後を目の当たりにし、死とは何かを体で感じ取つていったものでした。しかし現代では病院で、家族ではなく、さまざまな蘇生のための機器に囲まれながら死を迎えることが普通になりました。死は直接肌で感じるものではなくなつていったように思います。死が子供にも大人にも遠いものになつてしまいました。

しばらく前のことですが、その遠くなつた死に、そしてその恐ろしさにぐつと引き戻されるということを経験しました。大谷大学の教授を長く務められた仏教学者に曾我量深さんという方がおられますが、その曾我さんの「感応の道理」という文章を読んでたときのことです。「死は生に向かつて噛みついている。何時でも生のところ」に死が噛みついている」という文章を読んで、自分が死に首根っこを押さえつけられた存在であることを改めて思い知らされ、そのことの恐ろしさをひしひしと感じました。

ライオンが獲物を襲うときに、その強力なあごで獲物の急所に噛みつき、即死させるように、死の牙はわれわれの首に確実にくい込み、われわれを動けなくしているのだということを改めて思つたのでした。そういう意味で曾我さんは「本当は人間の命は一息しかない」というようにも書いています。

無常について語った文章はたくさんあります。古くは『万葉集』などにも人の世のむなしさを詠った歌がありますし、王朝女流文芸は「あはれ」や「はかなし」といった言葉に充ちています。また蓮如の次の言葉もよく知られています。

朝には紅顔ありて夕には白骨となる身なり。紅顔むなく変じて桃李の装ひを失ひぬるときは、六親眷属集りて歎き悲しめども、さらにその甲斐あるべからず。さてしもあるべき事ならねばとて、野外に送りて夜半の煙と為し果てぬれば、ただ白骨のみぞ残れり。

人の命のはかなさが非常に美しい言葉で見事なまでに語られています。だけれども共感を拒むことはできません。曾我量深さんの言葉にはそのような美しさはありません。その表現は磨かれていない鉱石のようにごつごつと角張っています。しかし、死が人間にとって何なのかということを的確に言い表しているように思うのです。人間の身動きのとれないさまが、端的に、直截に言い表されています。

「真理のことは」ということについて少しばかり考えてみたのですが、われわれが目をそらそうとしても、そこへと引き戻さずにはおかينだけの力をもった言葉こそが「真理のことは」と言えるのではないかと、改めて思った次第です。

本稿は、電子マガジン『esay'a』の創刊号のために寄稿されたものでありますが、当センターの都合により、同誌の発行を見合わせたために、著者のご了解をいただき、本年報に掲載することになりました。この紙面を借りて、著者にご迷惑をかけたことをお詫び申し上げます。（井上円了記念学術センター

所長 清澤文彌太